食人大陸

美女は激しい凌辱の末に
食肉として売買される

作者 大黒達也

『食人大陸』

作者　大黒達也

一．はじめに

十九世紀後半、中国雲南省に神出鬼没の盗賊団が現れる。謎の美女軍団を率いる日本人の正体は……。そして彼の真の目的は何なのか……。

数年間隔の干ばつによる慢性的な飢饉状態の中で、美女達は略奪され、陵辱の末に人肉売買組織によって売り買いされる。

二．登場人物

リュウ

謎の盗賊団の首領。銃剣、格闘技とあらゆる戦闘の技に長ける若者。

紫苑（しおん）

リュウが統率する盗賊団の副長。国籍は不明だが、絶世の美貌とたぐい希な肢体を持つ女。

メイ

性交奴隷かつ食料として、処分されところをリュウに救われた若くて美しい女。紫苑に対し、同性でありながら恋心を抱く。

蛇佼（じゃこう）

中国全土を、縄張りとする人肉売買組織の長。リュウ

と運命的な闘争を繰り広げる。

三・目　次

第一章　極　刑
第二章　大盗賊
第三章　紫　苑
第四章　美　囚
第五章　悪魔の晩餐
第六章　襲　撃
第七章　奴隷市
第八章　餓狼団
第九章　巨人族
第十章　饗　宴

第十一章　妖　女
第十二章　陵辱の嵐
第十三章　永遠の命

『本編』

第一章　極刑

ウンナンマツが生い茂る森に囲まれた街外れの刑場には、いつになく大きな人だかりができていた。今日はこの一帯を根城にして、悪逆の限りを尽くしていた盗賊団の首領が、処刑される日であった。中央に立てられた太さ十センチ長さ二メートルほどの木杭には、盗賊団の首領が既に縛り付けられていた。

首領は驚くべきことに、若い女であった。しかも、とびきり器量がよく、美しく豊かな肢体を持った女だ。手の平にあまるほどの乳房が、大きく盛り上がっていた。年の頃は二十歳前後という若さだ。女は、全裸に剥かれ、

四肢を木杭に縛り付けられていた。股は開かれているので、豊かな陰毛と膣が丸見えになっていた。膣は役人による陵辱のためか、赤く腫れ上がっていた。

群集は女を取り巻く様にして、卑猥な笑みを浮かべながら眺めていた。中には弁当や酒を持参しているものもいた。群集の最後部に、人並みはずれた大男が、片手で顎を摩りながら佇んでいた。平均的な背丈より首二つほど抜きんでていた。年の頃は、二十代後半から三十代前半といったところだ。

男は、当時の中国には珍しい黒色の牛皮製で丈が短いズボンを履き、同じく牛皮製の上着を着ていた。上着の上には、鎖帷子をつけていた。長大な日本刀を背負い、皮製の腰紐には、二丁の回転式拳銃を無造作な感じでさ

していた。一丁をアメリカ西部のならず者が好んでしたように前側に差し、もう一丁は左側に差していた。拳銃はスミス・アンド・ウェッソン・モデルスコーフィールドだ。十九世紀後半に製造された元折れ式の回転式拳銃であり、諸元は四十五口径、装弾数六連発、元折れ式なので他のシングルアクションリボルバーに比べ、装弾の操作が非常にスムーズなものとなっている。

男の後ろには、巨大な馬が草を食んでいた。ペニーシュロン。フランスで生まれた農耕馬であり、体重が一トン以上ある。

鞍には、当時中国にほとんど輸入されていなかった十二連発式のレバーアクション式ライフル、ウィンチェスターM七三が皮製のホルダーに収められていた。 男は、

着衣の上からでもわかる鎧のような筋肉に覆われ、浅黒く粗削りの顔に、鋭い眼光を放っていた。

その目が今まさに処刑されようとしている女の肢体に注がれていた。

その時、群集のどよめきが刑場に広がった。黒色の綿服を着た執行人が、群集に向かって女の罪状を読み上げ始めた。女は首をうな垂れ、上目勝ちに執行人の背中を見詰めていた。

罪状をすべて読み上げた後に、女の方に振り返り、腰に差した長さ三十センチほどの短刀を抜き放った。女の視線が、冷たい光を放つ刃に吸い寄せられた。

「これから、凌遅（りょうち）の刑を執行する」

凌遅の刑とは、二十世紀初頭まで行われた中国古来か

ら伝わる極刑で、囚人の肉を生きたまま一切れずつ切り取っていく残虐極まりないものであった。

執行人は、女の長い黒髪を鷲掴みにして、上を向かせ、声帯を一刀で断ち切った。血飛沫が上がり女は、苦悶の表情を浮かべた。次に、声を失った女の手まりのように豊かな右乳房を掴み、柔らかさを楽しむようにゆっくりと揉みしだいた。執行人は、卑猥な笑みを浮かべながら、短刀を前後に動かした。

女が全身を震わせ、獣のような唸り声を発し、尿を漏らした。次の瞬間、執行人の左手には血まみれの乳房が握られていた。群集が一斉に、歓喜に満ちた声を上げた。陶器製の壷を抱えた老婆が、前に進み出て、地面に置かれた竹製の籠に、一文銭を十枚投げ入れた。執行人は、

老婆に女の乳房を手渡した。

老婆は引っ手繰るように手掴みにして、それに齧り付いた。目を閉じて、ひと噛みの肉塊を飲み込み、満足の笑みを浮かべ、残りを壷に入れ立ち去った。

執行人は、激痛に身悶えする女を、少しずつ解体していった。切り取った肉はすぐさま群集に買い取られた。女は既に両乳房と、腿肉を切り取られていた。

執行人は、女を縛り付けていた紐を断ち切り、近くの木製テーブルにうつ伏せに横たわらせた。剥き卵のように、すべすべで白く盛り上がった尻肉を鷲掴みにして、短刀を突き立てた。女の背が逆海老反りに反り返った。執行人は構わず、拳代の尻肉を削ぎ取り、近くにいた中年の男に手渡した。男はせわしげな手付きで、自らの口

中にほお張り立ち去った。尻肉をあらかた削り取ると、今度は、息絶え絶えの女を、仰向けにして股間に短刀を突き刺し、器用に膣肉を削いでいった。再び、群集にどよめきが広がり、何人かが前に押し出そうとした。執行人の脇を固めていた役人達が大声でわめき散らし、押し返した。

膣肉は、珍味であり特に需要が高かった。若い女が、奪い取る様にして膣肉を、瓶に押し込み走り去った。女は生きたまま、身悶えしながら少しずつ肉を切り取られていく。気が付くと、先ほどの大男の姿が消えていた。

雲南省、昆明（くんみん）に続く一本道の遥か彼方に、先ほどの大男を載せた馬が、粉塵をまき上げながら疾走していった。

十九世紀後半、清王朝によって支配されていた中国では、数年間隔の大干ばつによって、深刻な飢饉が慢性的に発生していた。食料は高騰し、民衆は日々の食事を摂ることにも難渋した。強盗、殺人、強姦が日常的に行われ、さらには人肉の売り買いが公然と行われていた。人肉専門に扱う闇商人まで跳梁していた。せっぱ詰まって、娘や妻を売りに出す者が後を立たなかった。

中国では、古代から人肉を食用とすることが、希なことではなく、ひとたび戦争が起これば、民衆は軍隊の兵糧にされることも度々行われた。

「資治通鑑」の唐記に出ている黄巣の農民軍団は、数百基の巨大な石臼で一日数千人の食用人間をすり潰し食べていたというから、国土の広さ同様にカニバリズムと

いう側面からもスケールが大きな国であった。

第二章　大盗賊

標高千九百メートルの高地に位置する昆明は、亜熱帯に位置するものの、標高が高いため一年を通じて爽やかな気候が続く。真夏でも二十度前後、冬でも十度以下に下がらず比較的過ごしやすい環境であった。

時節は六月、街中にツバキやモクレンの花が咲き乱れていた。市街中央を南北に走りぬける通りを、一頭の馬が巨漢の男を載せて、のろのろと進んでいた。

男は、観光目的であるかのように辺りを、物珍しそうに眺めていた。

通りの一角に人だかりができていた。興奮のどよめき

が伝わってきた。男が馬の歩みを止め、馬上から様子を伺った。

二人のいかつい体つきをした男が、互いに向き合っていた。周りを取り囲んだ観衆がしきりに囃し立てていた。一人は、頭をまるめ、埃まみれになった黄色い法衣を身に付けており、間合いの取り方、どっしりとした構え方から少林寺拳法の熟練者に見えた。もう一人は、流派は不明だが、長い棒を突き出すような構えと気合の入れ方から、こちらも拳法の達人と類推された。二人とも平均的な身長から首ひとつは背が高く、がっちりとした身体つきをしていた。

向かい合う二人の背後に作られた木製の仮設ステージには、若い女が全裸で、縦杭に腰紐で繋がれ、床に転が

されていた。仮設ステージの前には、看板が立てられ、それには、試合を行い、勝者には豪華景品が与えられるという趣旨の内容が書かれていた。驚くべきことに、生身の人間を景品にしていた。

女は、まだ二十代の前半であり、クリッとした円らな瞳に、むっちりとした肢体をもっており、気色の無い表情で男達の戦いをぼんやりと眺めていた。

その時、女の横に立っていた胴元と思われる男が、がなり声を上げた。

「さあ、さあ。皆、賭けてくれ。少林寺の旦那と、盗賊の頭領の大試合だ」

観衆は、胴元の足元に置かれた柳の籠に、次々と百文銭を投げ入れた。

「旦那達も準備はいいかい？」

二人が無言で頷いた。

「勝った者は、ごらんのとおり生身の女が貰えるんだ。それもとびきり上等な女だよ。折り紙付きだ。女の身体は二度楽しめる。わかるよね。抱きごたえがあるよ。しかも飽きたら、絞めて、煮るなり焼くなりして食えるんだからな。どうだい。この脂の載った美味そうなおっぱいは？」

胴元は、女の側に屈み込み、豊かに盛り上がった乳房を鷲掴みにした。

女が「うっ」と呻き声を上げた。

「さあ。四つん這いになって、旦那達にケツを拝ませるんだ」

胴元が、打って変わって低く押し殺したような声で命じると、女は、よろよろとした動きで四つん這いになり、観衆と二人の男に、剥き卵のように白くすべすべで形のいい尻を向けた。胴元が屈み込み、尻の膨らみを両手で押し広げ、合間を舐め上げた。どよめきが観衆に一気に広がった。

「さあ。旦那達。時間ですぜ！」

胴元の叫び声を合図に、二人の男達はジリジリと間合いを詰め始めた。口髭の男が、頭上で棒を大きく回し始めた。少林寺が怪鳥のような雄叫びを上げ、素早い動作で一瞬のうちに間合いを詰め、腰を屈め、回し蹴りを放った。

口髭がそれを避けるように大きく跳びあがりながら、

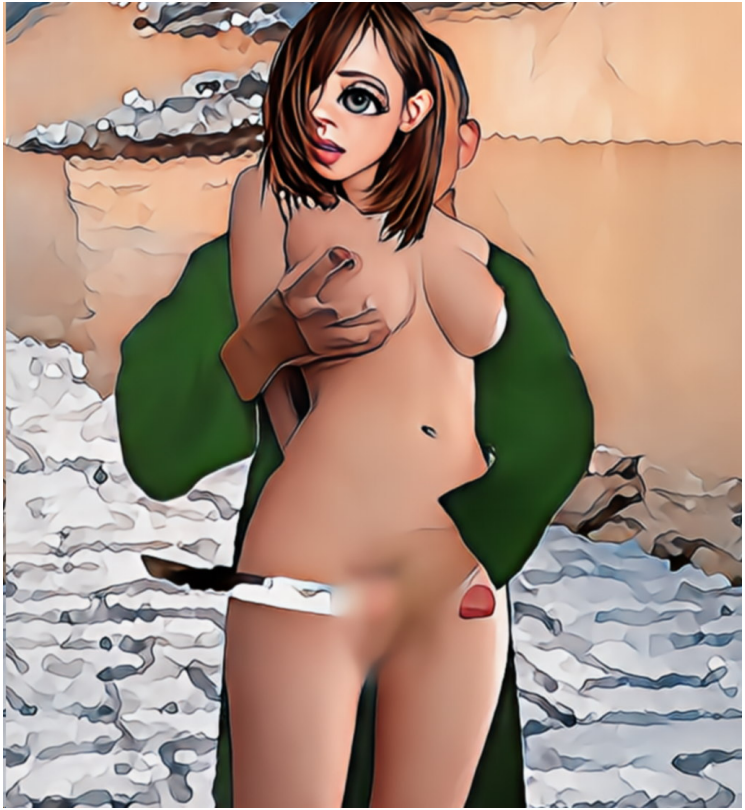
棒を叩き付けた。少林寺が一瞬で躱し、必殺の気合を込めた棒の先端が、空を切り、石畳の上に叩き付けられた。

口髭は着地とともに、棒を少林寺に向けて目にも止まらぬ速さで突き出した。少林寺はその度に手の平で、棒の先を叩くようにして躱した。二人の力量は拮抗しているかに見えた。

その時、少林寺が棒の先端を脇で抱え込む様にして押さえつけ、口髭の股間を蹴り上げた。見事に決まり口髭は股間を、両手で押え石畳を転がった。少林寺が止めをさそうと近づいたその時、口髭の身体が回転し、少林寺の両足をすくい上げた。少林寺は頭から石畳に激突し、白目を剥いて昏倒した。口髭が少林寺の頭を抱え、力任せに捻じり上げた。ボキリという大きな音がして、口か

ら鮮血を吐き、ピクリとも動かなくなった。

あまりの凄惨な光景に、観衆は静まり返っていた。口髭が、ゆっくりとした動作で立ち上がり、仮設ステージ上で震えている若い女に近づいた。腰に差していた短刀を抜き放ち、女を縛り付けている腰紐を断ち切った。



それから女を背後からかきい抱き、空いている方の手で乳房を強く握り締め、短刀の切っ先を首に当てた。

「約束どおり、この牝ブタは頂くぜ」

「だ、旦那。もしかしてここで捌くつもりですか？」

「悪いか？もう三日も何も食べていない」

「止めて！死にたくない！」

「うるさいぞ。牝ブタが口をきくものか」

その時、先ほどの巨漢の男が、ゆっくりとした動作で前に歩み出た。

「何だ。お前は？お前も死にたいのか？」

口髭が女を離し、ステージから飛び降りた。

「試合に勝てば、女を貰えるのだな」

少し訛りが混じった野太い声が、巨漢の男から発せられた。

「ふふふ。笑わせるぜ。この李白様を舐めるなよ」

言うが早いか、地面に転がっていた棒を引っつかむと同時に怪鳥のような雄叫びを上げ、巨漢の男に突き掛か

った。男は、その先端を片手で無造作に掴み、強く捻じり上げた。口髭が反動で一回転し、石畳にしたたか背中を打ちつけた。

男は奪い取った棒を背後に放り投げた。口髭は、血が滲む口元を手の甲で拭き取りながら、ゆっくりと立ち上がった。

「妙な技を使いやがるぜ」

独り言を呟きながら一気に距離を詰め、男に掴みかかった。片腕を男に取られたと思った瞬間、頭から石畳に叩き付けられた。男の技は、日本の伝統的な武道である合気道に似ていた。口髭は頭部から出血し、血まみれになりながらよろよろと立ち上がった。男に掴みかかろうとしたが、目の前から男の姿が消えていた。背後に異様

な殺気を感じ、振り返った。腹部に凄まじい衝撃を受けた。男の左拳が手首まで腹部に突き刺さっていた。次の瞬間、男の右拳が顔面を砕いた。今度は先ほどとは打って変わって、ボクシングのボディ・ストレートの連続技を繰り出していた。口髭が大きな音を立てて、石畳に倒れ伏した。首がありえない方向に捻じ曲がっていた。ひっそりと静まり返っていた群集が、再び大きくどよめいた。それがおさまりかけた頃、「女は貰っていく」と言い放った。男は、ステージで惚けたような表情で男を見詰める女に近づいた。片手で軽々と肩に抱き上げ、馬に近づき、鞍の前側に女をうつ伏せの姿勢で括り付けた。馬に跨り、何事も無かった様に、その場を立ち去った。男の後ろ姿を観衆の一人が、驚きの表情を浮かべながら、

じっと見詰めていた。見えなくなってから、清軍が逗留している官舎がある中央通りに向かって小走りに走り始めた。

第三章　紫苑

日が西の空に沈みかけた頃、街の郊外に位置する遊郭の門前に、先ほどの男が馬を止めた。女とウィンチェスター小銃を鞍から降ろし、女を肩に担ぎ、近くにいた番人に馬の手綱を渡した。

「リンゴと水をたっぷりやってくれ」

番人に声をかけながら、懐から取り出した小袋を渡した。番人が中身を検めた。一文銭がぎっしりと詰まっていた。

「こんなにいいんですか？」

番人は、女の盛り上がった尻の膨らみに見とれながら言った。

「ああ。頼んだぞ」

そう言い残し、男は門をくぐった。蓮の花が咲き乱れる池を配した中庭を通り抜け、宿の玄関に入った。貧相な顔をした中年男が迎い入れた。

「昆明飯店にようこそ。こちらの切り盛りをしています、店主の黄と申します。何なりとお申しつけください」

「麦酒か葡萄酒はあるか？」

「老酒ではなく、麦酒ですか？ございますよ。独国から取り寄せました特級品を置いております。地下水で飲みごろに冷やしてあります」

「それと、食い物だ」

「それも御座いますが、当店は、……その……美しい女が商品でございまして」

「そうだったな。キレイどころを揃えてくれ」

巨漢の男はそう言いながら、懐から黄金色に輝く小さな塊を取り出し、店主に手渡した。それを見た店主の顔が、驚きの表情を浮かべた。それを口に運び、歯で小さな傷を付けた。

「黄金でございますか？」

「紙屑同然の紙幣よりいいだろう？」

店主は大きく頷きながら、それを懐に仕舞い込んだ。

「ところで、そちらの女性は……？」

「こいつか？ここに来る途中、格闘の見世物があってな。

そこで手に入れた。この街では食用に女を売り買いするのか？」

店主は盛り上がった白い尻を見詰め、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「昨今は、何処でも珍しくありませんよ」

「そうか……そろそろ、案内してくれ」

「これは失礼しました。どうぞ、奥にお進みください。迎えの者がお待ちしておりますから」

男は、店主に女を預け、大股で奥に進んで行った。店主は抱き上げた女のむっちりとした太腿と、歩き去る男のどっしりとした後ろ姿を、交互に見詰めていた。廊下の突き当たりで、赤い薄絹のみをまとった一人の女がひれ伏していた。

「案内の者か？」

「はい。今宵のお相手を務めさせていただきます李（り）と申します」

女が顔を上げた。細面の顔に、切れ長の二重瞼を持ち、鼻筋がとおり、美しい顔立ちをしていた。胸の隆起も見事だ。女が立ちあがり、男と向かい合った。腰がきゅっとしまり、胸の膨らみをいっそう引き立てていた。薄絹を羽織っただけなので、股間の恥毛がはっきりと見えた。女が先頭になり、男を奥へと導いた。後ろからの眺めも絶品で、尻の盛り上がりも大きく極上の肢体を持っていた。

案内された部屋は、十畳の寝室と三十畳ほどの居間が繋がったもので、寝室には御簾が降ろされた広大なベッ

ドがあり、居間には、半分のスペースに、自然石が敷き詰められ、中央に大人五人でゆったりとつかれる浴槽が設けられていた。残り半分には、四人がけのテーブルを配し、無数の調度品が壁際に置かれていた。

また、壁の一面が中庭に面しており、蓮の花を浮かべた池を中心とした中華庭園が一望に見渡せた。

男は背中に担いでいた長大な日本刀とウィンチェスター小銃を、壁に立てかけ、腰の皮紐に差した二丁の拳銃をテーブルに置いた。それから、部屋の中央で妖艶な笑みを浮かべる李を見詰めた。

「これからどうすればいい？」

「まずは、お風呂で汗をお流しします」

李は、絹のように滑らかな指先で、男の手を取り、浴

槽の側に導いた。浴槽には湯がいっぱいに張られ、湯気が朦々と立ち上がっていた。そこで、纏っていた薄絹を脱ぎ去り、彫像のように佇む男の皮紐を解き、ズボンを脱がせた。さらに鎖帷子を取り去り、皮製の上着を脱がせた。想像していたとおりの、贅肉が皆無で、鎧のような筋肉に覆われた裸体が露になった。男は白い褌一丁で、李の前に立っていた。李が男の腰に手を回し、褌を解いた。黒々として屹立した男根が剥き出しになった。しばし李はその大きさに見とれていた。頬を赤らめ、桶で湯を汲み、自身の股間を湯で丹念に洗い流した後に、男根を慈しむように洗い清めた。それから、おもむろに口に含み、味わうように舌を絡ませた。

男が女の黒髪を鷲掴みにして腰を振り始めた。男根が

喉をつくのか、李は時折苦しげな呻き声を上げた。男の動きが速くなり、「うっ」とうめいて李の口に放った。李の口元から精液が滴り落ちた。男は李の腕を取り、立ち上がらせて、指先を膣に差し込んだ。そこはすでに十分な潤みを持っていた。

「……焦らないで」

李が耳元で甘く囁いた。それから、男の手を取って浴槽内に導いた。男を浴槽内に座らせ、男の顔のすぐ前に立ち、焦らすように指先で股間を押し開いた。サーモンピンクの膣が露になった。

「舐めて」

男は最初、舌先で軽く襞を突っつくようにしていたが、おもむろに女の尻を抱きよせ、がつがつといった感じで

膣に吸い付いた。包皮を捲り上げ、クリトリスを強く吸った。

「ああ……。いい……逝っちゃう。逝く！」

李は、大きな声を上げ、男の頭に持たれかかった。目をつぶり、しばらく荒い息を立てていたが、身を持ち直し、立ち上がった。後ろ向きになり、男の顔に豊満な尻を上下に擦るように押し付け、そのまま男の股間に尻を落とした。

ずぶりという感じで男根を膣内に導きいれた。膣内は男根でいっぱいになった。李の肛門に指先を忍ばせ、空いている方の手で豊かな乳房を弄んだ。

「お客さん。何処から来たの？言葉に訛りがあるし。こ

の国の人じゃないようね？」

「わかるか？生まれは、会津若松だ」

「会津？」

李は顔を回し、男の顔をまじまじと見詰めた。

「日本国の北側に位置している。冬には冷たい雪が降る」

男は女の乳房を片手で弄びながら遠くを見るような目つきをした。

「日本から来たの！」

李は驚いたような声を出した。

「ああ。だが国を離れて、十年以上になる。今では随分と変わったようだ」

「そうなんだ。名前はなんていうんですか？」

「……名前か？リュウとでも呼んでくれ」

十分に暖まってから、李はリュウと名乗る男を浴槽の外の床に寝かせ、舶来品の石鹸で全身をくまなく洗い始めた。髪にも石鹸を塗り込め、湯をかけて洗った。リュウは気持ちがいいのか、目を閉じて身を任せていた。李は改めてリュウの浅黒く、引き締った肉体に見ほれていた。贅肉が少しもなかった。背丈の高さも通常ではない。長い四肢を持ち好きなタイプの男だった。リュウの硬くつるりとした感じの尻を、押し開き肛門に舌を這わせた。

「ああ……」

リュウが低い喘ぎ声を漏らした。その時、ドアをノックする音がして、

「お食事をお持ちしました」

という声が聞こえた。リュウは、うつ伏せのまま顔を声

の方に向けた。店主の黄が、長身の中年男と二人の若い女を伴って現れた。三人はそれぞれ、キャスター付きのテーブルを押していた。中年男が押していたテーブルには、何かが載せられ、白い布が被されていた。女達の押すテーブルには、湯気の立つ数々の料理が載せられていた。水餃子、鱶鰭のスープ、子豚の丸焼き、蟹等山海の珍味が持つ食欲をそそる匂いが部屋中に広がった。女達が、手際よく料理を、テーブルに並べていった。リュウは立ち上がり、李が桶で湯をリュウの全身にかけ、石鹸を洗い落とした。

「お邪魔でしたか？」

店主の黄が、愛想笑いを浮かべながら、抜け目の無い視線を向けた。

「いや。ちょうど腹が減っていたところだ」

タオルで洗い髪を拭きながら、リュウは答えた。その視線は、黄が伴って現れた中年男に向けられていた。

「この男は、調理長の陳でございます。今宵は特別料理をお持ちしました」

陳は、軽く会釈をして、キャスター付きテーブルに掛けられた布を払い落とした。そこには、リュウが健闘試合で手に入れた女が、全裸で猿轡を噛まされ、後ろ手を縛られた状態で横たわっていた。

「お客様の趣向が分からないので、焼こうか煮ようか迷いました。それで活き造りにしようと思いまして」

黄が説明する間、陳がテーブルの下から巨大な中華包丁を取り出し、女の乳房を持ち上げ、根元に当てた。女

は逃れようと必死に身悶えしていた。額からは大粒の汗が滴り落ちていた。

「始めて、よろしいでしょうか？」

黄が尋ねた。それには答えず、リュウはテーブルの上で震えている女に近づき、おもむろに股の間に手を差し込んだ。膣に指先を差込、感触を探るように動かした。

「脂が載って美味そうだが、まだ抱いていないんだ。食うのはその後だ」

「わかりました。麗に香。女を風呂に入れなさい。丹念に洗うのですよ」

黄に呼ばれた女達が、テーブルの女に近づき、縛ったまま持ち上げ、浴槽の側に運んだ。それから、女の裸身を湯の中に投げ入れた。両手を縛られたままなので、起

き上がることができなかった。女は苦しそうに顔を、何とか湯から持ち上げていた。女達は笑いながら、女の身体を持ち上げ、磨き上げられた自然石の床にうつ伏せに寝かせ、石鹸で全身を擦り始めた。肛門や膣は特に時間をかけて洗い清めた。女達は女の身体を洗いながら、乳首を軽く噛み、肛門に指先を挿入するなど、いたずらをした。その度に女は小さな喘ぎ声を上げた。何時の間にか、二人の男はいなくなっていた。リュウは李と素っ裸で、隣り合ってテーブルに付き、地下水で十分に冷やされたビールを飲みながら、蟹の甲羅に齧り付いていた。例えようのない豊潤な香りが口一杯に広がった。料理に舌鼓を打ちながら、女達の痴態を眺めていた。麗と香の二人は、女を洗い終えると本格的に責め始めた。

両手を後ろ手に縛られ、自由が効かない女の両足を大きく押し開き、指先を肛門と膣に差込み中をかき回した。唇に吸い付き舌を絡ませ、乳房を口に含みしたい放題に責めた。女は目にいっぱいの涙を溜めていた。

「葡萄酒をくれ」

リュウが李に催促すると、李はグラスに注いだ赤ワインを口に含み、男根を手で摩りながら、口移しで飲ませた。赤ワインを飲み干してから、再び蟹の甲羅に武者振り付いた。李がリュウの股間に顔を入れ、男根を口に含み、舌で嬲り始めた。リュウは李の白く盛り上がった尻を掴みながら、ビールのグラスを一息で空けた。

「女をテーブルに載せろ」

リュウが女達に命じた。女達は、女を荷物のように持

ち上げ、料理が置かれていない部分に仰向けに載せた。股間がよく見えるように、大きく股を割り、押さえつけた。サーモンピンク色の膣が剥き出しになった。リュウは立ち上がり、女に近づき、前屈みになり膣に口を付けた。

若い女の素晴らしい匂いが、鼻孔をくすぐった。舌で舐め回した。女は感じているのか目を閉じて、時折甘い喘ぎ声を上げた。暫く口で楽しんだ後、太腿を鷲掴みにして、男根を膣にあてがい、一気に挿入した。腰を捻じ込む様にして動かし始めた。三人の女達が、周りで食らいつくように眺めていた。

「いい……。もっと……。そこ、そこ……いい。逝っち

やう」

挿入を続けるリュウも息が荒くなっていた。腰の動きも激しさを増し、射精の寸前に李が動いた。リュウの腰を強く引き、女から引き離し男根を口に含んだ。男根が弾けて、李の口中に大量の精液が注ぎ込まれた。李は喉を鳴らしながら、すべてを飲み込んだ。

「ねえ。お客さん。私お腹が空いちゃった。この女食べていいでしょう？」

返事を待たず、李は中華包丁を持ち出し、女の乳房を持ち上げた。

「止めて！殺さないで！」

「うるさい。牝ブタが。これから私が料理してくれるわ」

中華包丁を盛り上がった乳房の根元に持っていったその時、リュウがその腕を掴んだ。

「止めておけ。血で周りが汚れる。それに楽しみは後にとっておくものだ」

「……そうね。今は、こいつのオマ＊コを刻むだけにしておくわ」

麗と香が、女の両足をいっぱいに押し広げた。李が残忍な笑みを浮かべて、小粒なクリトリスを指で持ち上げた。

「止めて！お願い！」

女が全身を震わせながら、声を限りに叫んだ。中華包丁がクリトリスの根元に押し当てられた。女が仰け反り、尿を迸らせながら失神した。李がそれを顔で受けた。

「ははは。気絶したよ。まだ、何もやってないのにね。それにしても可愛い女は、おしっこも美味ね」

中華包丁をテーブルに置き、代わりにキュウリを、膣に差し込み、こねくり回した。それを抜き取り、愛液に濡れた先端をガブリと噛みきった。

「お客さんもいかが？中々いけるわよ」

無邪気に笑いながら、リュウの口に押し込んだ。それを見ていた麗が、今度は女の膣にナスビを強引に捻じ込んだ。香も笑いながら、肛門に炒飯を詰め込み始めた。

「ねえ。この女丸焼きにしない？」

「いいわね。串焼きにしましょうよ」

三人の女は、失神した女の裸身に粗塩をまぶし始めた。

「うっ……」

女が失神から覚め、自分の身体に塩を塗りたくる女達を見回した。

「お目覚めかい？今、お前の身体に下ごしらえをしているところさ」

女は、肛門と膣に異物感を覚えていた。特に炒飯をいっぱいになるまで詰められた直腸から、強烈な排泄感が湧きあがっていた。

「お願いです。厠に行かせて下さい」

女は蚊の泣くような声で囁いた。

「駄目だね。ここでするんだ。麗。タライを持って来て」

麗が持ってきたタライに女を跨らせて、口を開かせ、ビールを注ぎ込んだ。

「ほら。飲みな。牝ブタ！」

女達三人はタライの上で、中腰になり排泄感を必死に堪える女に、纏わり付き乳房をこね回し、膣内を指先で掻き回した。

「嫌！」

絶叫とともに、ブリブリと内容物がひじり出される音が響いた。大量の炒飯に液体状の便が混じったものが、タライの中に広がっていった

「臭いね。まったく鼻が曲がりそうだ。女を洗ってちょうだい」

李が命じると二人の女は、女を浴槽の側の、自然石の床に寝かせ、お湯をかけ石鹸で洗い始めた。

「洗い終わったら、今度はベッドに運んでね」

李は女達に命じてから、リュウの腕を取り隣室のベッ

ドへと導いた。御簾を跳ね上げ、リュウを仰向けに寝かせた。リュウの男根は痛いほど猛り狂っていた。

「あの女が気に入ったの？」

李が男根を摩りながら耳元で囁いた。

「そう見えるか？」

「ここは正直よ」

黒々とした男根を呑み込み、美味そうに音を立ててしゃぶり始めた。麗と香がぐったりとした女を荷物のように運んできた。女をうつ伏せにして、股座がリュウの顔に覆い被さる様にして寝かせた。二人の女達もリュウに纏わり付き、三人でかわるがわる男根と肛門を口や手で弄び始めた。

午前三時を過ぎた頃、昆明飯店の周囲には、ゲーベル銃で武装した清軍兵士五十名あまりが、散会し、店内の様子を伺っていた。密かに店主の黄が、隊長の朕に呼び出されていた。

「黄店主。確かにこの男か？」

灯篭の明かりに照らし出された赤ら顔の朕隊長が聞いた。朕は五十代前半ででっぷりと太った小男だった。

「はい隊長殿。夕刻近くにやってまいりまして、今も当店に宿泊しております」

黄は、朕が差し出した手配書に描かれた似顔絵をまじまじと、見詰めながら答えた。手配書には、リュウと名乗る客にうりふたつの顔が描かれ、雲南省界隈を荒らしまわる盗賊団の首領と書かれていた。

「こいつは、竜鬼団という盗賊団の首領で、この界隈を荒らしまわる極悪人だ。情報提供者には天子様から千文が賜れるぞ」

「それは、恐縮に存じます」

「で、そいつはどの部屋にいるんだ？」

黄は懐から、店内の図面を取り出し、地面に広げ、一個所を指差した。

「ここでございます。中庭に面した南向きの一室です」

「本当に奴はひとりなのだな？」

「はい。嘘偽りはございません」

「たわけた奴よの。たった一人でやってくるとは。飛んで火にいるとはこのことだ」

リュウが宿泊している部屋では、店の女達が皆寝入っ

ていた。リュウは起き上がり衣服を身に着け始めた。居間から食物を啜る音が聞こえてきた。居間では、灯篭のほの暗い明かりの中で、先ほどの女が、後ろ手で縛られているため口で直に食べ残しを食るようにして食べていた。

「起きていたのか？」

「はい。お腹が空いて眠れませんでした」

リュウが女の背後に回り、懐から小刀を取り出し縛めを解いた。

「助けて下さるのですか？」

「今のうちに食べておけ」

「やはり。私を食するのですか？」

「食われたいか？」

リュウは女の豊かに盛り上がった乳房を食入るように見詰めた。女は思いつめたような顔をして、首を横に振った。

「ネズミがいる」

「ネズミ？」

「鉄砲を持ったネズミが、屋敷の周りをうろついているんだ」

女は、開け放たれた戸板の外に広がる中庭をじっと見詰めた。その時、厚手の木綿でできた軍服を着て、編傘を被った清軍兵士が、一人ゲーベル銃を構え、中庭から現れた。リュウの右手が稲妻のように動き、リボルバーのスコフィールドを抜き放ち、兵士に向かって構え、左手の平で撃鉄を叩いた。ドカンという銃声とともに、兵

士は大きく後方に吹き飛び、中庭の石畳に頭から落ち動かなくなった。リュウが使った技は、ファニングというもので、引き金を絞ったまま、撃鉄を手の平で叩き発射させるものであった。親指で撃鉄を起こすより、圧倒的に早い速度で連射が可能だった。

「旦那さん。大丈夫ですか？」

女が床に伏せた格好でリュウを見上げた。

「そこでじっとしていろ」

リュウは、兵士が落としたゲーベル銃を拾い上げ、中庭の茂みに向けて引き金を引いた。ドカンという銃声とともに、「ギャー！」という断末魔が聞こえた。それを継起にして方々から銃声がわきあがり、壁に銃弾が撃ち込まれた。

「わー！」という喚声とともに、五人の兵士が中庭から突進してきた。

リュウは、脇を締めた手でスコフィールドをかまえ、ファイアリングで連射した。五発の銃声とともに、敷居を跨ごうとした兵士達に着弾し、その身体を後方に吹き飛ばした。全員が眉間を打ち抜かれ、即死状態だった。空になったスコフィールドを腰に巻いた皮紐に差し込み、もう一丁を素早く抜き放った。

「お客さん！いったいどうなっているの？」

李が寝室から叫んだ。

「死にたくなかったら、ベッドの下に隠れていろ！」

リュウは、空いている方の手でウィンチェスター小銃を引っつかみ、中庭の植え込みの下に身を隠した。その

時、四方から銃声が鳴り響き、少し前にリュウが立っていた辺りに着弾した。家具や調度品の破片が飛散した。銃撃は一瞬で止んだ。単発、先込め式のゲーベル銃では、次弾を撃つまでに時間が必要だった。

リュウが植え込みの下から姿を現し、周囲に向かって腰ためにかまえたスコフィールドをファニングで連射した。その度に重い苦痛の叫びが沸き上った。

すぐに全弾撃ち尽くした。近くの植え込みから兵士が二人躍り出て、槍を構えながら突進してきた。ウィンチェスター小銃に持ち替え、レバーを引き、引き金を絞った。二度銃声が鳴り響き、眉間を打ち抜かれた清軍兵士がその場に崩れ落ちた。屋敷の内部からも、女達の悲鳴があちこちから聞こえていた。

中庭に面した部屋の戸板が、吹き飛び十名余りの兵士が、喚声を上げながら飛び出してきた。中庭に躍り出てリュウに向かってゲーベル銃を乱射した。兆弾が庭石を砕き、池の水面に水飛沫を上げた。リュウは植え込みの陰から、ウィンチェスターを連射した。空薬莢が宙を舞い、黒煙がもうもうと立ち込める中、兵士達の断末魔が湧きあがっては消えた。

ウィンチェスターも全弾撃ち尽くしたので、腰に差してあった空のスコフィールドを抜いて、エジェクションボタンーを押し、空薬莢を一気に排出した。四十五Ｓ＆Ｗが六発装填されている木製で、レンコン型の弾入れを取り出し、回転式弾装に載せ、中身を一気に押し込んだ。エジェクションからリロードまでの数秒余りの時間で終

えていた。もう一丁にも同様に装弾した。どよめきが上がり、四方からゲーベル銃や槍をかざすようにかまえた兵士の群れがわきあがり、リュウに殺到した。スコフィールドが連射音を響かせ、兵士達をなぎ倒していった。一瞬で銃声が止み、辺りには黒煙がたち込め、兵士達の呻き声が満ちていた。

リュウは再び、1丁のスコフィールドに弾を込め、辺りを伺った。と、その時、爆音がして外から中庭に通じる大扉が、粉々に粉砕された。朦朦と白煙が立ち込める中、扉があった方向から三つの人影が現れた。

「親方！ご無事ですか？」

パチパチと木々が燃え爆ぜる音の中、ハスキーな女の声が聞こえた。

「その声は、紫苑(しおん)か！」

辺りの白煙が薄れ、三人の女達が現れた。三人とも、美しい容貌肢体を持ち、リュウと同じ、拳銃のスコフィールドや銃剣を装着した小銃のウィンチェスター七三で武装していた。真ん中の東洋人の女は、年の頃は二十代前半に見え、流れるような黒髪を後ろで束ね、聡明で彫りの深い顔立ちを持っていた。残りの二人は白人で、燃えるように輝く金髪を持ち、東洋人の女に仕えるように従っていた。三人とも背が高く、乳房や尻が驚くほど豊かに盛り上がっていた。

女達は、その瑞々しくはちきれんばかりの肢体を赤い薄皮の着衣で包んでいた。丈の短いスカートからは、む

っちりとした太腿がはみ出し、半袖の上着の胸元は大きく割れて、乳房の盛り上がりが見えていた。上着の上に鎖帷子を羽織っていた。

「私達の出番はなさそうです……」

紫苑と呼ばれた女は、そう言いながら、目にもとまらぬ速さで腰のホルダーからスコフィールドを引き抜き、地面に伏せた姿勢でゲーベル銃を構えていた清軍兵士に向かって引き金を引いた。見事なＧＵＮさばきだった。兵士は顔を、銃弾によって砕かれ一瞬の後に絶命した。

「あいも変わらず見事な腕だな」

リュウが心底感心したような声を上げた。

「親方。その女は？」

紫苑の問い掛けにリュウは後ろを振り返った。何時の

間にか、格闘の見世物で手に入れた女が佇んでいた。

「メイ・リーと申します」

女は背筋を伸ばし、凛とした口調で言った。

「こっちに来なさい」

メイと名乗る女は、リュウの脇を通りぬけ、紫苑の前に立った。

「メイですか。いい名前ですね。名前からして、生まれは香港ね？」

「はい」

愛くるしい大きな二重の瞳で、紫苑の顔をじっと見詰めた。

「親方。この女を貰っていいですか？」

「ああ。お前の好きにしろ」

紫苑はメイを抱きしめ、

「怖がらないで」

と耳元で囁いた。それから、後ろに控えていた二人の女に向き直り、「エイダ。生き残りの兵を始末して、キャサリンは、食料と女達を捕まえる指揮をとるのよ」と命令した。

二人の女は大きく頷き、振りかえって短く、大きな口笛を吹いた。それを合図に外界に通じる大扉から、数十人の武装した女兵士の集団が躍り出てきた。

皆、若く美しい容貌肢体を持ち、同じ着衣を身に纏っていた。人種も様々で、白人、黒人、黄色人種が揃っていた。エイダが指揮する女達は、地面に横たわる兵士達の急所を銃剣で突いて回った。重く陰惨な断末魔が、中庭

に満ちた。

一方、屋敷内からは、全裸にされた店の女達が、後ろ手を縛られ、女兵士達に引きずられようにして出てきた。その中に李の姿も見えた。

「皆、粒揃いね」

紫苑がリュウに向かって言った。

「ああ。いい値が付くだろう。俺は先に戻る。馬を回収しておいてくれ」

リュウはそう言い残し、大股で中庭を横切り、破壊された正面玄関を抜けた。店の前には、黒々とした三台の機関車に似た乗り物が止まっていた。三台とも全長は十メートルを越え、鋼鉄製の車体を六輪の車輪で支えていた。それぞれの屋根の前側には太く短い煙突があり、さ

らにガトリング砲が二門、アームストロング砲一門が配置されていた。ガトリング砲は千八百六十年代にアメリカで、ジョージガトリングという医者が発明した連発式の銃で、複数の銃身を束ね、それをクランクで回転させて、装弾、発射、排莢を行う構造となっていた。

アームストロング砲は、後装式であり砲身内にライフリングを有しており、当時、最も威力があり命中精度が高い大砲であった。リュウは、その中の一台に近付き、鋼鉄製の重い扉を開け、中に入っていった。そのような構造の車両は、当時、中国はおろか、ヨーロッパの先進諸国においても知られていなかった。

第四章　美囚

リュウを首領とする盗賊団の一行を乗せた蒸気式戦闘車は、時速三十キロの速度で西に向かい進んでいた。日は山際に傾き、辺りには黄昏が迫っていた。車内では非番の女達による酒盛りが始まっていた。昆明飯店から強奪した女達を取り囲むように、車座となって赤ワインや老酒の入ったグラスを傾け、談笑していた。捕虜の女達は、素っ裸に剥かれ後ろ手を縛られ、床に座らされていた。どの女もその美しい顔に恐怖の色を浮かべ、首をうな垂れていた。誰もが皆、盗賊に攫われた己の運命を呪っていたに違いない。

酒盛りがピークに達した時、流れるような金髪に豊満な肢体を持った女戦士が立ち上がり、捕虜の一人を引き

ずり出した。昆明飯店で、李と一緒にリュウの相手をした麗だった。女戦士に片腕で、両腕を一まとめに掴み取られた麗は大きな瞳に涙を溜め、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「助けて。お願い！」

女戦士は卑猥な笑みを浮かべて、麗の盛り上がった乳房を掴みしめた。

「嫌！」

「キャロライン。もっと優しく可愛がってあげなよ」

二人の様子を眺めていた者が囃し立てた。キャロラインと呼ばれた女戦士は、麗を抱きしめ強引に唇を奪った。麗は同性との口付けは始めての体験だった。

男と違って柔らかい舌がねっちりと絡み付く感触に我を

忘れそうになった。ぐったりとキャロラインに身を任せたとき、麗の腰に回した手の指先で、肛門を一突きにした。キャロラインの腕の中で、麗の身体がビクンと跳ねた。指が肛門の奥底にまで入り込み、中を掻き回していた。

「痛い。止めて！」

麗は必死にもがき、握り拳がキャロラインの胸を叩いた。ガツンという衝撃が脇腹を襲い、麗は腹を押さえてその場に蹲った。

「自分の立場が分かっていないようだね」

キャロラインが冷たく言い放ち、麗を床に四つん這いに這わせた。染み一つない白く盛り上がった尻の膨らみを、素手で叩き始めた。ビシッ、ビシッという音とと

に、麗の尻が赤くなっていった。

「許して。許して下さい！」

麗は泣き叫んだ。折檻は暫くの間続けられた。キャロラインは、ぐったりと床に横たわる麗の頭を持ち上げ、唇を奪った。麗の舌を吸い出し思う存分に舐めた。

「そこに四つん這いになりな」

麗はキャロラインの命令に素直に従った。キャロラインは、麗の後ろに、立ち膝の姿勢で座り、目の前の豊かな尻を両手で押し広げた。そこに顔を付け、ジュルジュルと音を立ててしゃぶった。肛門に、舌先を捻じ込み、中を掻き回した。それから指先を伸ばし、肛門に強引に捻じ込んだ。あまりの苦痛のため麗の背筋が反り返った。ミシミシという音を立て、手首まで差し込まれた。麗は、

眉間に皺を寄せて必死に耐えていた。冷や汗が額から浮き出していた。キャロラインのもう一方の手が膣に差し込まれた。強引に奥まで押し込んでいった。麗の肛門も膣もキャロラインの両手で満たされていた。膣と肛門の中で、手が淫らに動き始めた。苦痛が凄まじいまでの快感に変わり始めた。鼓動が激しくなり、背筋に鋭い快感が瘧(おこり)のように走り抜けた。キャロラインが送り出す両手の合間から、麗の愛液と小水が迸った。

「おお……。いい……い」

麗の狂態を眺めていた女達に、激情の炎がともり、下を向いてうつむいていた捕虜達に一斉に襲いかかった。捕虜達は泣き喚き、許しをこうた。女兵士達はその美しい顔を、欲情に歪めながら、泣き喚く捕虜を引きずり出

し床に転がした。捕虜十名に対し二十名の女戦士達が、狂ったように嬲り始めた。

まだ二十歳を過ぎたばかりの女が、二人の女戦士に押さえつけられていた。むっちりとした太腿を大きく押し広げられ、膣を舐め回され、重たげな乳房を揉みしだかれた。四つん這いの姿勢を取らされ、尻を舐められる女や顔を女戦士の太腿に挟まれ、膣を舐めるように強要される女もいた。正常位で抱きしめられ、唇を吸われる女や、立ったままの姿勢で前後から指先で肛門や膣を貫かれ、乳房を揉まれ泣き叫ぶ女もいた。

車内は女達が上げる喘ぎ声や泣き声で騒然となっていた。女戦士の中には互いに抱き合い、唇を貪るものや相手の膣を舌で舐め回す者も現れた。隠微な匂いが漂い、

捕虜達のむせび泣き、喘ぎ声そして女戦士の高らかな笑い声が響いた。数十人の美しい女達が全裸になり、互いの膣や肛門を貪り、愛液を啜り、鋭い喘ぎ声を上げていた。

一方、リュウと紫苑の専用車では、最後部の寝室でリュウが、部下のエレンの白い尻を抱くようにして、高鼾を立てて眠っていた。リュウの剥き出しになった股間には、部下のジェーンが張り付き、黒々とした男根を一心にしゃぶっていた。隣室では、絨毯を敷いた床で紫苑とメイが全裸で絡み合っていた。

部屋の中央には、全裸にされた李が、天井から垂らされた粗紐で吊り下げられていた。李は粗紐で縛られた両手を上げ、爪先が床につくかつかないかの状態で吊るさ

れていた。李の盛り上がった尻には、幾筋もの鞭打ちの跡が残され、膣には長さ五十センチほどの棒が差し込まれていた。

「メイ。気が済んだ？」

紫苑の豊かな乳房を舌で舐っていたメイが顔を上げた。

「まだよ。一晩中嬲られたのだから」

紫苑は優しくメイの髪を撫で上げ、立ち上がった。ナイフを掴み、李の股間に差し込んで、峰の部分で膣を叩いた。

「起きるんだよ。メイがまた相手をしたいそうだ」

李を吊るしていた粗紐を切断した。李が大きな音を立てて床に落ちた。

「うっ……」

李が呻き声を上げて失神から覚めた。メイが仰向けに倒れている李の顔に跨り股間を押し付け、前後左右に腰を打ち振った。

「さあ。お舐め。私をいかせる事ができたら許してあげる」

李は舌や唇を使ってメイの膣や肛門を舐め上げた。

「さすが昆明飯店でナンバーワンだけあって、美味そうな身体をしているね」

紫苑は、李のむっちりとした太腿を押し広げ、先ほどカミソリで剃り上げたツルツルの膣を見詰めた。指先を忍び込ませた。中は熱く、十分に湿りを帯びていた。指先で襞をなぞるように動かし、指を抜いた。膣口がまるで、生きのいいアワビのように蠢いていた。おもむろに

股間に顔を埋め、舌で膣を舐り始めた。包皮をめくりあげ剥き出しになったクリトリス強く吸引した。

「うっ……。ああ……あ」

李の身体がビクンと動き、低い喘ぎ声を上げた。

「どうしたの？休んだら承知しないよ」

メイが後ろ向きになって、紫苑の顔を見詰めた。大きな二重瞼がきらきらと輝き、頬がほんのりと赤み帯びていた。

「お姉さん。この女を殺してもいい？」

「大事な商品だから、メイの頼みでも聞けないわ」

それを聞いたメイの顔が急に暗くなった。

「仕方のない娘ね。寸前で止めるのよ」

「わかったわ。お姉さん。女の両足を掴んでいて」

メイはそう言いながら、李の両腕を両足で挟み込み、細首を両手で掴み、ぐっといった感じで力を込めた。李の美しい顔が見る間に、蒼白になり舌を出し、白目を剥いた。背筋が反り返り、むっちりとした太腿がぶるぶると震えた。死線期の痙攣が始まっていた。紫苑は李の両足を押さえながら、ぱっくりと開いた膣口に口を付け、激しく吸引した。小水が迸り、紫苑の口をいっぱいに満たした。若く美しい李の小水はえもいわれぬ味がした。喉を鳴らし飲み込んだ。

突然、カラカラと甲高い笑い声が響いた。メイが李の上で腹を抱えて笑っていた。李は目にいっぱいの涙を溜め、ゼイゼイと苦しそうな息を吐いていた。

「満足したの？」

「ええ。最高の気分よ。こいつがヘマをやらかした時は私に処分させて」

「いいわよ」

だが、紫苑は、死の直前まで責め苛まれた李の姿を見て、サディスティックな気分が燃え上がった。立ち上がり、隣室に消えすぐに一匹の犬とサルを連れてきた。犬は狼にそっくりな風貌をしており、体長は二メートル近かった。青い瞳に灰色の体毛に覆われていた。サルは日本サルで体長は一メートル近くあった。紫苑は床でぐったりと、仰向けに横たわっている李の膣や肛門や乳房に、持ってきたバターを厚く塗り込み、犬達をけしかけた。犬が李の股間に鼻先を入れ、長い舌で膣を舐め始めた。サルは李の腹に腰掛け、乳房を舐め始めた。

「嫌！止めて！」

正気が戻った李が大声を上げた。サルが大きく跳び下がり、長い牙をむき出し、李を威嚇した。狼犬が、顔を上げ「う……う……」と低い唸り越えを上げ、鋭い牙をカチカチと噛み合わせた。

「死にたくなかったら、大人しくするんだね。今日はまだ餌をやっていないから、逆らうと食われちゃうよ」

紫苑が、バターを塗られ、狼犬の唾液で光る膣を見詰めながら言った。李がわなわなと震え始めた。

「もっと股を開くんだよ」

李は嗚咽を漏らしながら、むっちりとした太腿を開いた。サルがまた腹の上にのり、盛り上がった乳房を揉みし抱き、乳頭を舐め回した。狼犬が、膣口に鼻先を押し

込み、匂いを嗅ぎ長い舌で舐め回した。李は両手で顔を覆い、号泣していた。暫くの間膣や肛門を舐め回してから狼犬が膣から離れ、脇腹を鼻先で押し上げ、李をうつ伏せにひっくり返した。豊かな尻の膨らみを軽く噛んだ。李の背筋がビクンと震えた。

「四つん這いになりなとさ」

李は泣きながら、ゆっくりとした動作で四つん這いになり狼犬に尻を突き出した。狼犬は李の股間をひと舐めしてから、豊満な尻に覆い被さった。狼犬の細長いペニスが李の膣に差し込まれた。紫苑は、李の脇の下にバターを塗り込んだ。サルがすかさず、脇の下に顔を入れ、舐め始めた。狼犬は四、五回腰を激しく振り射精した。すぐに李から離れ壁際に移動し、横になった。

サルが狼犬にかわって、李の背後にぴったりと身体を寄せ、むきだしになった肛門を舐り始めた。暫くやめようとしなかった。突然、李の豊満な尻に覆い被さり、牙を剥き出しにして、ペニスを膣に挿入し激しく腰を振り始めた。

紫苑とメイは、二人がけのソファに座り狂態を眺めていた。メイが自分より長身の紫苑を、後ろから抱きしめ、片手で豊かな乳房を揉みながら、空いている方の手で紫苑の膣をまさぐっていた。

紫苑はよほど気持ちがいいのか、目は虚ろで、口を半開きにして小さな喘ぎ声をあげていた。

「お姉さん。逝っていいのよ」

「いい……。メイ。ステキよ……」

「お姉さん。椅子の上で四つん這いになって」

紫苑は言われるままに、メイの前で四つん這いの姿勢をとった。メイは嬉々とした表情で紫苑の尻に頬擦りをして、肛門に唇をつけ、舌で舐り始めた。

「いい……。食べて。メイ」

メイは顔を上げ、目の前の白くすべすべの尻を軽く噛んだ。その傍らでは、サルが朦朧とした状態の李を仰向けに寝かせ、膣を舐めていた。狼犬も近づいて来て、乳房をペロペロと舐め始めた。メイは指先を伸ばし、愛液で濡れた紫苑の膣に挿入し、注送を繰り返した。

「おお……おお……いい……」

紫苑の咽び泣きが、響いた。

「お姉さんは私のものよ。裏切ったら許さないから」

第五章　悪魔の晩餐

翌日も終日、リュウ達一行を乗せた蒸気式戦闘車は草原につけられた一本の道を、ひたすら西に向かい走り続けていた。日も傾き、夕暮れが近付く頃、一行を乗せた車は、高原の中に、突然現れた集落に近付いていった。日干し煉瓦でできた平屋造りの家屋の合間を抜け、小高い丘に建てられた広大な邸宅を目指していた。

そこは、周囲を深い掘りで囲まれ、そこに通じるのは一本の石橋のみであった。邸宅の外壁は、煉瓦を積み重ねたものであり、高さは五メートルほどであるが、一辺の長さが百メートルを越えていた。

三台の蒸気式戦闘車は、橋の手前で止まった。リュウと紫苑の二人が中から現れ、橋を渡り始めた。二人が橋

を渡り終える頃に、一辺が三メートルはある大扉が音も無く開かれた。そこにでっぷりと太り、細い目を持った色白の男が、立っていた。

「これは、これは。珍しい。リュウ様に、紫苑様。何年ぶりでしょうか？」

「張も相変わらず、元気そうだな。三年ぶりか？北京以来だ」

「そうでしたね。さあ。立ち話も何ですので中にお入り下さい」

二人は、張の後について、池や林がある広大な中庭を歩き始めた。門の左右にゲーベル銃で武装した二人の巨漢が、立っていた。

二人は、天井が高く、広大な応接の間に案内された。一方の壁はガラス張りになっており、中庭が一望できた。薄い絹製の衣を羽織っただけの女が、持って来たお茶を飲みながら、三人で話し始めた

「夕食の準備に少し時間がかかります。案内したいところがあるのですが……」

張が二人を案内した場所は、苔むした石造りの回廊を抜けた地下の一室だった。壁に灯された松明かりの中に、白いものが浮き上がった。五人の白人女が、全裸で岩の壁に、両手首を鎖で繋がれていた。皆、若く、美しい顔立ちに豊満な肢体を持っていた。釣り鐘状の盛り上がった乳房、豊かな腰の膨らみ、そして長い四肢は見るものの視線を釘付けにした。女達は、張の顔を見ると、唇が

薄紫色に変わり、蒼白な表情を浮かべ、激しく震え出した。張は女達のひとりに近付き、前かがみの姿勢にさせ、盛り上がった尻の合間に、指先を差込、荒々しく動かした。

「ああ……。痛い。張様お許しを……」

「どうです。最高でしょう。こつらを手に入れるのにどれほど苦労したことか」

「確かに。粒ぞろいだ」

リュウは、片手で顎を撫でながら答えた。紫苑はリュウの傍らに立ち、無言で女達を見詰めていた。時より上唇を舐めた。

「旦那。どれにします？」

張はただ、にやついた笑みを浮かべた。リュウは無言

で、五人の中で最も背が高く、グラマーな身体付きをした女を凝視していた。

「紫苑様はいかがいたします？」

「真ん中の……」

紫苑はリュウが見詰めていた女を選んだ。

「お二人ともお目が高い。かしこまりました。さあ。そろそろ宴会の支度が整った頃合いです」

リュウと紫苑は、一方の壁が中庭に面した広さ五十畳ほどの部屋に案内された。壁という壁に、日本や中国の絵画が掛けられ、部屋の隅には、高級な陶芸品が無造作に置かれていた。部屋の中央に十人かけの食卓テーブルが鎮座していた。

二人は、ひとつの席を空けて、隣り合わせに座った。

目の前には、酒や前菜の料理がところ狭と置かれていた。張は二人と向き合う席に座り、大きく手を叩いた。両開きの扉が開けられ、薄絹一枚を纏った美女達が現れた。

きれいな身体のラインが浮き出しになり、股間の陰影が、全裸でいるよりさらに艶めかしかった。リュウの視線が女達を追った。先ほどの白人女の姿は見えなかった。女達はリュウと紫苑の隣席に座り、酒を注いだ。

「さあ。商談の前に、ちょっとだけ腹ごなしをしましょう。再会を祝して！」

張が、老酒が入ったグラスを高高と上げた。リュウと紫苑が、ビールが満たされた杯をあげた。女達が、リュウと紫苑の手を、自らの股間に導きいれた。料理は女達が、口に運んでくれた。

サービスはさらにエスカレートしていった。テーブルの下に入り、二人の前にしゃがみ込み、股間に顔を入れ口で性器を嬲り始めた。女の口が気持ちよさそうにリュウの男根を呑み込んでいた。紫苑は、むっちりとした太腿を押し広げられ、剥き出しにされた膣に舌先を入れられていた。二人は、無言でされるがままだ。

「ところで。今回は何をお望みですか？食料ですか？」

「食料は手に入れた。お前に頼みたいのは、石炭と水だ」

「で、見返りは？」

張が抜け目無さそうな表情を、リュウに向けた。

「宝石と女ならある」

「両方いただきたい」

「相変わらず、正直な男ね」

紫苑が皮肉めいた口調で呟いた。リュウは、懐から拳台の皮袋を取り出し、張に放り投げた。帳は見かけによらない機敏な動作で受け取り、中を検めた。とたんに、顔がパッと輝いた。中には、大粒の翡翠の原石が、ぎっしりと詰まっていた。

「これは、これは極上の品ですね」

リュウはそれには答えず、紫苑に向き直った。

「紫苑。済まないが、女をひとり連れて来てくれ」

「はい」

紫苑が席を立ち、五分ほどで女を伴い、戻ってきた。昆明飯店から拉致してきた麗であった。

「これは美しい。翡翠と女で石炭五トン分の価値はありますね」

張が麗の全身を舐め回すように見詰め、舌なめずりをした。

紫苑は蒼白な表情をした麗を、張に引き渡した。

「交渉成立です。この女はいただきましたよ」

麗の手首を握り締めた張は卑猥な笑みを浮かべ、空いている方の手で、テーブルの上に並んでいる料理を、床に落とした。慌ただしい手付きで、麗が唯一身に纏っていた薄絹の衣を剥ぎ取り、テーブルの上に横たわらせた。仰向けになった麗の乳房を、重量感を確認するかのような手付きで揉み始めた。張の大きな手の平から、肉塊が食み出していた。張は思いっきり握り締めた。

「いや！痛い」

「気に入ったよ。リュウ様」

さらに、張は、麗の太腿を押し広げ、中を覗き込んだ。サーモンピンクの膣肉が、蠢（うごめく）いていた。脂ぎった顔を醜く歪め、そこに武者振り付いた。ピチャピチャという音が聞こえた。

「うーむ。若い女のここは最高だ。ちょっと塩気が欲しいな」

張は独り言を言いながら、傍らにあった塩が入った器を手に取り、中身を麗の膣肉にまぶした。

「痛い！許して」

麗は両手で顔を覆い、身悶えしながら号泣した。いっそう大きく太腿を押し広げ、顔を押し付けた。

「塩気がきいて美味だ」

張は暫く、麗の性器を弄んだ後に、うつ伏せに寝かせた。目の前に死にたくなるようなきれいな尻の膨らみが現れた。両手を尻に載せ、目を閉じてソフトに撫で回した。おもむろに目をかっと見開き、すべすべとした膨らみに噛み付いた。

「ギャー！」

麗が全身を震わせた。張はかまわず、まるで肉塊を噛み千切ろうとするかのような勢いで、数箇所に歯を立てた。麗は激痛と恐怖のために失禁した。尿がテーブルに広がり床に零れ落ちた。

張は顔をあげ、

「そんなに気持ちがいいか？」

と言うと、

「ふー」

と息を大きく吸い込み、尻の合間に顔を押し込んだ。

張は、二人の客人のことを忘れていた。麗の重たげな乳房を揉みながら、肛門に舌を入れた。次第に、麗の豊満な裸身が、桃色に染まり、押し殺したような喘ぎ声が漏れ始めた。喘ぎ声が、一段と高まった時、張は座ったままの姿勢で、麗を後ろ向きにして、股間に落とした。ズブリという音がして二人は交合した。麗の裸身がピクンという感じで跳ねた。

「こっちの締まり具合も最高ですよ」

張に背後から抱かれた麗は、目を閉じぐったりとうな垂れていた。その時、肉が焼ける香ばしい匂いが室内に

広がった。

「そろそろ、メインディッシュの時間ですね」

張はそう呟き、手を頭上で叩いた。ドアが開けられ、キャスター付きのテーブルを押した二人の男が現れた。何とテーブルの上には、肛門から口までを、鉄串で貫かれた全裸の女が載せられていた。全身が、顔を除き、きれいなきつね色に輝き、湯気があがっていた。既に絶命しているようで、両目を大きく見開き、ピクリとも動かなかった。男達は、女の身体を張の前のテーブルに横たえた。

「紫苑様が選んだ女ですよ。串焼きにしてみました。気に入りましたか？」

「……」

紫苑は、硬い表情で調理された女を見詰めていた。股間では、世話人の女が、激しい勢いで膣を舐っていた。

「いや！」

張に抱かれていた麗が目を開け、目の前に置かれた女の死体を見詰め、わなわなと震え出した。すぐに失神し、音を立てて床に倒れ込んだ。

「地下の牢獄に繋いでおけ。それからもう少し太らせるんだ」

男達に命令した。男達は頷き麗の両手両足を掴んで持ち上げた。股間から張の精液が滴り落ちた。張は、運ばれていく麗の尻を、粘りのある目付きで見詰めていた。

麗を運ぶ男達が出て行くと、おもむろに女の腿肉を両手で掴み、一塊の肉塊を剥ぎ取った。どのような技術を使ったのか肉はみるからに柔らかく、張の手の中で湯気をあげていた。張はそれを皿に載せた。さらに一方の乳

房を、手でもぎ取り皿に盛り付けた。それをリュウに渡すように、傍らの女に命令した。

「どうぞ。白人女は脂がのっていて美味ですよ」

リュウは目の前に置かれた湯気をあげている肉の塊を暫く見詰めていた。室内は静寂に包まれた。リュウは一掴みの肉を手に取り、口に放り込んだ。口内に得も言われぬ芳香が広がった。人肉を食するのは初めての経験だった。リュウの感覚では羊と豚の肉をあわせた感じがした。癖が無くいくらでも入りそうだった。十分に咀嚼して、ごくりと飲み込んだ。満足そうな笑みを浮かべた張が、今度は細身のナイフを手に取り、女の股間に差込み動かした。一瞬後、きれいに切り取られた膣肉を皿に載せ、傍らの女に渡した。

「紫苑様。この女を選んだ特権です。ここは珍味ですよ」

紫苑は、ナイフで肉を切り取り、口に入れた。臭みは無く、こりこりとした感じだった。その時、叩き付けるような快感が股間から湧きあがった。股間では世話人の女が、膣や肛門を舐めまくっていた。対面の席では張が、串焼きにされた女を、うつ伏せにして、尻肉にがつがつとした感じで齧り付いていた。

異様な感覚に支配され、紫苑は自分を失いつつあった。もう堪えることはできなかった。股間の女の頭を、太股で強く締め付けた。女が紫苑の肛門に指先をずぶりと刺し込んだ。

「ああ……。いい……」

紫苑は喘ぎそして背を仰け反らせて果てた。意識が朦

朧として、すぐに気を失った。

「リュウ様。紫苑様を譲っては貰えないでしょうか？」

張は椅子に座ったまま気を失った紫苑を、暗い輝きを帯びた目でじっと見詰めていた。

「紫苑も食らいたいのか？」

「紫苑様なら、全財産と引き換えでも……」

「妄想は自由だが。口に出すと命を失う言葉もある」

「め……滅相も無い。冗談です。忘れてください」

「馳走になった。石炭と水をすぐに積み込んでくれ」

リュウは、立ち上がると紫苑を抱きかかえ、部屋を出ていった。張は暫くの間、扉をじっと見詰めていた。

「何度会っても、おっかない男だ」

そう呟くと、周りにいる女達に向かって言った。

「お前達も食べていいぞ」

女達はぱっと顔を輝かせると、白人女の丸焼きに殺到した。それぞれが、手で柔肉を剥ぎ取り、貪るように口に運んだ。他の料理に手を出すも者はいなかった。

第六章　襲撃

紫苑は、車両の上部に迫り出した監視塔に上った。広さ二畳ほどの監視塔の四方は透明なガラスが張られており、周囲を見渡すことができた。メイがついて来ていた。持参した双眼鏡で周囲の様子を伺った。特に異常は見られなかった。

「お姉さん。じっとしてて」

メイは、紫苑の皮製のスカートを下げ下ろし、剥き出しになった豊かな尻の割れ目に舌を這わせた。紫苑は、監視塔の手すりに手をついて、目を閉じされるがままだ。

メイが紫苑の愛液で濡れた顔を上げた。

「お姉さん。親方と寝たわね？」

「メイ。親方は特別なの。堪忍して」

「……いいわ。そのかわり私も親方と寝たい」

メイが紫苑の肛門に、指先をズブリといった感じで挿入した。

「……いいわよ。親方には私から話しておくから」

紫苑の息が荒くなった。メイが隠し持っていた巨大な張り型を取り出し、一方を自らの膣に挿入した。その張り型の先端が二つに分かれていた。それぞれが長さ三十センチはあった。

「お姉さん。手すりに掴まって、前屈みになるのよ。いいものをあげるわ」

紫苑は素直に従いメイに、豊かな尻を突き出した。メイは背後から紫苑の腰を両手で掴み、愛液で濡れた膣と肛門にイボイボがついた張り型の先端をあてがった。間

髪を入れず下から一気に突き上げた。

「ああ……。そこは駄目。裂けちゃう。許してメイ……」

メイは腰を突き上げながら、紫苑の髪を鷲掴みにして荒々しく、引寄せ唇を奪った。音を立てて舌をしゃぶりまくった。

「むぐ……。おおお……」

紫苑の乳房がゆさゆさと揺れ動いた。紫苑は長い黒髪を振り乱し、声をあげて泣いた。不意にメイが、紫苑から離れた。紫苑はぼんやりとした表情でメイの姿を探した。

「大変！追手よ」

紫苑は、起き上がりメイが指差す方角を見詰めた。とたんに表情がキリリと引き締まった。傍らの伝声管に向

けて叫んだ。

「敵よ。清軍兵士、約一千騎が、東方より接近中」

「紫苑か？よくやったぞ。すぐに戦闘配置につくように指令してくれ」

リュウの落ち着いた声が、伝声管から聞こえてきた。紫苑は、下半身を剥き出しにしたままの姿で、壁にかけてあった黒い筒を、見方の二台に向けた。素早く手先を動かした。筒の先端から眩い光が発射された。すぐに、相手から光りによる返信が返ってきた。メイは呆然とした表情で、砂塵を舞い上げ、迫り来る約一千騎の騎馬兵を見詰めていた。

「円陣を組め！」

リュウは操縦室の中央に位置する船長席にかまえ、伝

声管を使って監視塔の紫苑に命令した。三台の蒸気戦闘車が、道から外れ、ゆるやかな起伏を帯びた牧草地に乗り入れ、ゆっくりと円陣を組み始めた。

その間も敵軍は、距離を詰めてきていた。先頭の部隊とは、直線距離にして三百メートル足らずの距離だった。

車両の周囲に無数の銃弾が飛来していた。鋼鉄製の装甲に、被弾して火花を上げていた。厚さ一センチの装甲は、清軍が使用している銃弾ではびくともしなかった。

「砲撃開始！」

リュウの指令が飛び、各車両の砲塔が、敵軍に向かって照準を定めた。間髪を入れず、アームストロング砲が轟音を放った。敵軍の先頭部隊に着弾し、大音響をあげ人馬もろとも宙に舞い上げた。砲塔内では女兵士二人が、

額に汗をかきながら、てきぱきとした動作で砲弾を装填していた。三門の砲身から放たれた砲弾は、敵軍を引き裂いた。

「一号車、火龍（ひりゅう）発射！」

リュウの乗った車両の中央部の屋根が開き、銀色に輝くロケット弾の先端が現れた。南北戦争以来、固形燃料式のロケット弾が使用されるようになっていた。

濛々とした白煙があがり、長さ二メートルあまりのロケット弾がゆっくりと上昇していった。敵軍の頭上百メートルの地点で爆発炎上した。ロケット弾に込められていたガソリンに引火して、敵軍兵士の頭上に豪雨のごとく降り注いだ。戦場はさながら、この世の地獄と化していた。全身を焼かれ火脹れになった死体が転がり、無数

の重苦しい断末魔で満ち溢れた。

砲弾とロケット弾から免れた部隊が、一気に距離を詰めてきた。ガトリングガンの射手が、急接近する敵軍に向けて、四十五口径ロングコルト弾を猛射した。敵兵が、人馬もろともバタバタと倒れていった。戦闘は、あっという間に終了した。開始から十分あまりというあっけない幕切れであった。生き残った清軍兵士は、四方に潰走していった。味方には、一人の犠牲者も出なかった。旧態依然の装備で、数だけで押してきた清軍とでは、装備の質に格段の開きがあった。

戦闘車の周辺には、血まみれの死体が、無数に転がっていた。黄昏が迫っていた。惨劇のあとを、血のように赤い夕日が照らし出していた。

第七章　奴隷市へと続く